

イヴァン・ジャブロンカ『私にはいなかた祖父母の歴史』読書案内①

訳者・田所光男先生インタビュー

〈訳者の名古屋大学人文学研究科・田所光男先生に、こ

の本の特徴や魅力についてインタビュー形式でうかがいました。すこし読んでみたけれど、なんとなくとつつきにくい、そうした声も聞かれます。ではどうして、難しいと感じるのでしょうか? 「読みにくさ」のワケについて、翻訳しながら先生が意識していたこと、感じたことなど、ざつくばらんに語っていただきました。本書をよりいっそうお楽しみいただくために、ご参考になれば幸いです。〉

やっぱり、難しい?

**田所光男先生**(以下、**田所**) この本を読んでくれた人たちが、コメントをほくに送ってきているんですが……その、やっぱり難しい! って言うんですよ。

——難しい、というのはやはり内容でしょうか?

**田所** すなわち、もつと注釈をつけたほうがよかつたんじゃないか、と言われました。さまざまに分野の手法が取り入れられて学際的な内容になっているし、言語もいろんなものが使われているから。読んでいくと、「あつ、ここは小説で……えーつと、あ、今度は歴史の叙述か!」みたいなところもあるように。

それから、もう一つ言われたのは、なぜポーランドでユダヤなのか、ということ。アウシュヴィツツとかを知っている人にとつては、ポーランドの位置づけが理解できると思うんですが、そうじゃない人にとつては、なんで突然ポーランドなの? と、まずそこから疑問に感じるみたいで。ああ、そういうんだつたら、この本ゼツタイ売れないや、なんて(笑)

—(笑)

### 冒頭のノリにくさ

—先生もおっしゃったように、とくに冒頭、いろいろな言語が入り交じっているところは、やはり翻訳もたいへん苦勞されたのではないでしょうか？

**田所** うんうんうん……そうですね。最初の部分、ポランドのところは、ほくもやりながら感じていたんですけど、やっぱりノリにくいんですよね。すごくノリにくくて……ルポルタージュ風であり、旅行記風であり。なにより、過去のことでも現在のことも、すべて現在形で書かれているんですよ。

ちよつと文法の話になりますが、フランス語には過去形がいくつかあって、ふつう、書きことば、とくに歴史の本なんかでは「単純過去形」という形で記述されます。一方、話しことば、会話などで過去のことを語る場合は「複合過去形」を用いる、そういうふうには習い

ます。

例外的に、臨場感を出すために、過去のことを語っているときでも、ある一部分だけ現在形を使うことはあるんですけど、この本の場合は、過去と現在が、ぜんぶいっしょに現在形で書かれています。

—なるほど。たしかに、読みはじめたときちよつと違和感がありました。

**田所** でしょ、やっぱりそうでしょ？ だから、そのままじゃ読者はぜんぜんわからないだろうと思って、日本語にするときは過去形を交ぜるようにしたんです。といっても、ぜんぶ過去形にするのもそれはそれでまずいので、転換の場面に過去形をちよつと入れたり、その後はまた現在形を使ったり、いろいろ工夫しました。読んでくれた同僚は、これ、すごく大変だったんじゃないの？ って言ってくれて(笑)

—ほんとうにそうですね(笑) ややこしいですね。作品中、おなじ現在形で書かれていても複数の現在がある、

ということでしょうか。

**田所** ええ。書いている現在と、調査している現在、そして、調査されている一九XX年の現在が、すべて現在形で書かれているんですね。やっていくうちに、だんだんとジャブロンカ特有の使い方がわかってきました。

——やはり、あえてそういうスタイルを選択しているのでしょうか？

**田所** もちろん、あえてやっているんだと思いますね。ぼくは、ずっとフランス語をやってきましたが、ほんとうのネイティブではないので、妻（シルヴィさん）に訊いてみたくです。すると、やっぱり上手だ、って言うんですね。引き込まれる文体だと。ぼくは、逆に下手とは思わない？ ぜんぶ現在形なんだよ？ と言ったんですけど（笑）

日本語ですべてをおなじようには再現できませんが、それでもやはり、ほんとうに魅力のあるところなんだと思いますね。

——そのあたり、翻訳されるうえでどのように工夫されたのでしょうか。

**田所** すごく苦労しました。先ほども言ったように、日本語では現在形だけが続けてしまうと意味がわからなくなるので、転換の場面で過去形を入れ、また現在形の語りに戻す、というのが一つ。

それから、フランス語の表現に「自由間接話法」というのがあって、この作品の中では、かなり曖昧なカタチで用いられていて……くわしい説明は省略しますが、最終的には、編集の方にもご協力いただいて訳出しました。すべてをシステムティックにやってしまうのもよくないので。ジャブロンカって、じつは作家で、小説も書いているんですよ。そういうところもあつたから、原文にごまかされていないか、だまされていないか、ぼくが誤訳してないか、かなり集



中して取り組みました。

あとは、たとえば冒頭にシヤガールが出てきますが、日本語訳では、ここに注釈をつけることにしました。そうすることでイメージがはっきりしますし、逆に説明がないと、きつと日本の読者はなんにもわからないよね、と思って。ただ、正直なところ、あんまり書いてしまわないほうがいいのかな、とも思ったんです。ほら、プルーストが、一つの文字や色や地名をひっかけて表現しますよね。それと似たような感覚で書かれているところなので、意味を限定せず、自由なイメージにゆだねてもよかったですかね、と。プルーストなんかを読み慣れていけばピンとくる場所かもしれません……

——ヒントがないと難しそうですね。

**田所** やつぱり最初の部分が、ジャブロンカのいちばん凝っているところ、なんですよ。いわゆる文学調というか……。先へ進めば進むほどノリがよくなって面白いので、最初の部分だけ見てパッと判断してしまった人と、最後まで読んだ人とは、ずいぶん印象が違ってくる

作品じゃないかと思えます。

——最初はちょっと辛抱して、読んでいただきたいですね(笑)

### 無名の、非合法の人生

——前半部分で描かれている、共産主義活動のくだりも、人によっては読みにくい、というか、入り込めないな、と感じるように思うのですが……いかがでしょうか？

**田所** とある右の先生が、性格のわからない本だ、と感想を送ってこられたんです。わたしは賛成しない、というつもりで書かれたのかもしれませんが。非合法の人生というのは、ふつうエスタブリッシュメントの側からすると、不愉快なものなのかもしれませんね。こいつらダメじゃん、っていうか。

結局共産主義は失敗したとか、ダメになったとか、そんなふうに出た人たちのことを今のコンテキストで読んでしまったら、彼らはただのたまされたアホ、みたい

になっちゃいますよね。でも、そうじゃないんだ！ っ  
てことを、ジャブロンカは盛んに言おうとしています。  
この社会はダメだ、新しい社会をつくるんだ！ と、彼  
らはその当時から希望を抱いていたんだから。

じつはぼく、読書案内の関連図書に小林多喜二をあげ  
ようかと思っただけです。『党生活者』という本のなかで  
描かれている非合法の生活がよく似ているな、と思っ  
ただけ、あんまりそういうのばかりあげちゃうと完璧に  
左の人しか読まなくなっちゃうんじゃないかと思っ  
て、めたんだけど（笑）

——（笑）

**田所** 『党生活者』に「季節々々さえ、党生活のなかの  
一部でしかなくなつた」という一節があります。ふつう  
だったら、季節変化があるなかで人間の仕事があるわけ  
だけど、多喜二に言わせれば、党生活という大きな枠組  
みがあって、そのなかに季節すらも入っているだけなん  
だと。それくらい、トータルな存在。

これって、ジャブロンカのお祖父さん、お祖母さんの

世代にぴつたりの言葉ですよ。親戚の何人かは、アル  
ゼンチンへ移り住んで、今でも党员としての活動を続け  
ている。最後まで、革命だ！ 革命だ！ っって言ってる  
んですよ、年とって、七、八〇歳になつても。ジャブ  
ロンカは彼らを落ち着かせようとするんだけど、革命や  
らないで何やるんだ！ って怒っている人たちがいる、  
そういう場面が途中に出てきますけど、それくらい本気  
で、じぶんたちの生活すべてがそこにあつた。そういう  
ふうに生きていた人たちのことを、ジャブロンカは絶対  
に書きたかつたんですよ。彼らの、ポジティブな、純  
粋な、すべてを賭して生きていた姿を書き記すこと。そ  
れがこの本の目的の一つだつたんだと思います。二〇世  
紀の全体主義のなか、ポーランドでも、フランスへ行つ  
ても、不法外国人として、ユダヤ人として、無名という  
だけではなくて、非合法な存在として生きた人たちの歴  
史。それですよね。

——そういう人たちの人生を、今わかっている結果から  
フィルターをかけて見ずに……

**田所** そう、そういうことだと思います。歴史って、あ

るようで、じつはどこにもないわけだから。現在から見たら、過去の彼らはもう、ただのたまされたアホな男たち、女たち、そうなるだけかもしれない。だけどそこに、ほんとうの姿を見なくちゃいけない。そうすると、やっぱり現在形、なんですよ。過去に身を置いて、過去の現在に立ち会わなくちゃいけないんだから、それを単純過去形で、かつて終わってしまったかのように書きちゃダメなんです。だから、ジャブロンカの現在形にはすごく意味がある。

ジャブロンカ自身は「私」という言葉をよく強調していて、最初に橘さん（小会編集部長）とお話したときも、「私」ということについて考えてくださいね、と言われてました。それは翻訳するなかでもずいぶん意識していません。でももう一つ、ジャブロンカもあんまり明言しないんだけど、現在の現在性、やっぱりこれだよ。すでに決まっているように見えちゃう世界の、もう一歩奥にあるところ、そこへみずから入って行って、現在形で語ること。その現在の生成過程に立ち会っていくこと。

## 生成の行為

——その、いまおっしゃった「生成」という言葉に関連して……「生成の行為」というキーワードが、作品の冒頭に出てきます。「これは殺人捜査ではなく、生成の行為だ」と、本のオビにも使われていますが、うちの編集部から提案したものでしょうか？

**田所** そうなんです。だからすごくいいセンス、と違って。まさかここが抜かれるとは思いませんでした。ぼくなんかはどちらかというと、ユダヤ的にも読めちゃう「正義」とか、そういう言葉に目がいていました。まさに今ここで、歴史をつくっていく、という、そういうことですよね。

——余談ですが、書店でこの本のご案内をしていると、けっこうこの言葉につっこまれました。セイセイノコウイって何？ と（笑）なので、先生からもこの言葉について、すこしご説明いただけたらうれしいのですが。

**田所** はい。歴史って、今という視点から、すでに定まったものとして、つくられてしまっているじゃないですか。そうした枠をとり外して、そこに生まれつつある歴史を、現在形で書き記す。そういうことでしょうか……やっぱり難しいですよ、これ（笑）

——「殺人捜査」という言葉はなんとなく想像がつくようなんですが、「生成の行為」というと、なんだか哲学的で、難しそうなことを言っているな、と。

**田所** 殺人捜査というのは、殺人事件があつて、殺された人がいて、何が起きたかを調査していくわけですね。そこでは、起こったことは客観的な事実としてもう決まっちゃつてる。一方で、生成の行為には、そんなのだから決めたの？ っていうところがあるんじゃないかな。いまだ定まっていない、動いている事態があつて、そこに研究者が入っていく。研究者自身も動いている存在として、そのなかへ入っていく。そして、そこで立ち会う。動いている現場に、みずから立ち会う。そういうことじゃ

ないでしょうか。

——歴史の生まれるところに、みずから立ち会う。この作品の理論編にあたるジャブロンカの『歴史は現代文学である』（小会より来年刊行予定）にもそのような言及があつたように思います。……関連図書にもあげておられますが、以前、レヴィ・ストロースに似た雰囲気を感じるとおっしゃっていたのは、このあたりの考え方でしうか？

**田所** 近いと思うんですよ。レヴィ・ストロースの著作にも「私」が出てくるし、人類学者の、研究ノートと呼んだらいいんでしょうか、そういった個人的なメモのようなものまで明らかにしてしまう。どこの資料に、こうこうすればアクセスすることができた、なんてことは、研究論文にはふつう書きませんよね？

——この本でも、ジャブロンカのお父さんが資料の閲覧に必要な身分証明書を忘れてしまつて……そんな一幕が描かれていましたよね。

**田所** そうそう。カードを忘れちゃったとか、そんなことまで書いてますよね。調査がどんなふうに進んでいる

かを明らかにすること、そのことの面白さもあります。が、その調査自体もまた生成の行為である、そういうことじゃないでしょうか。歴史が書かれるとき、調査もまた歴史を生み出している。だからこそ、その調査も現在形で語られる。

あと、お祖父さんたちが刑務所のなかでハンガーストライキをやったり、食事や待遇に不満の声をあげたりすることなんかも、歴史の一つとして描いています。そんな、犯罪者とされる集団がやったことなんて、公的な、大文字の歴史とはまったく関係のないことですよね。だけど、そんな場面にも立ち会っている。歴史家の方たちは、これを読んでどう考えるんでしょう？ そんなこと、ありふれた、ふつうすぎる出来事だよ、と思うんでしょうか。そう言われてしまったら、そのとおりかもしれませんが……

フランス文学を選んでよかった

**田所** 作品の後半で、ドランシー（パリ郊外の町、ユダヤ人はここからアウシュヴィツへと移送された）からお

祖母さんがじぶんの子どもに宛てて書く、小さな手紙が出てきますよね。そんなような一つの小っちゃな事象を、どのようにして、その時代や、社会や、政治関係と結びつけて考えていくか。これは、関連図書にサイドをあけてもいますが、ぼくが長いことやってきた比較文学の基本的な考え方でもあるんですよ。テクストの連関性、テクストの平等性と言ったらいいんでしょうか。偉大な文学作品じゃなくても、走り書きのような文章でも、おなじように並べることができる。よく言われることです。が、純文学もエロ小説も一緒に扱うことができる。

——お祖母さんの手紙はとても感動的でした。すごく印象に残っています。

**田所** いちばんいいシーンですよ。じつはね、翻訳し



ながら、読みながら、ずーっと泣いてたんです。ジャブロンカも「私はふだん決して読まない」と書いていますよね。だつてこれは、ほんとうにじぶんのお祖母さんが書いたもので、そしてお祖母さんはこの後、ほんとうにいなくなつてしまつたわけだから。

ジャブロンカ本人にも伝えたんです。ほくはフランス文学を選んでよかつた、このテクストに出会えてよかつた、と。ふだん、文学とか思想とか、いろんなジャンルのものを読んでいます、これこそがフランスの、奥の奥の奥にあるテクストですよ。ほんとうにシンプルなフランス語なんだけれど……だからこそほくは、どうしたつてこれを伝えたくて、訳しました。その気持ちが伝わつたようで、うれしく思います。

——ぜひ、ここまで読み進めてもらいたいですね(笑)

**田所** そうですね(笑) 関連図書にもあげているように、アウシユヴィッツについてはいろいろな本が出ていますし、ゾンダーコマンド(ユダヤ人強制収容者で組織され、死体処理を担当させられた「特別作業班」)なんかにつ

いてはいろんなことが言われていますが、このテクストの、この部分ですよ。ぜひ読んでほしいと思います。

(インタビュアー・名古屋大学出版会 営業部)

〈訳者紹介……田所光男先生。一九五六年、東京都に生まれる。一九八五年、東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程中途退学。現在、名古屋大学人文学研究科教授。専門は、比較文学、比較文化、ユダヤ研究。共著書に、『異文化への視線』(名古屋大学出版会、一九九六年)、『講座 小泉八雲Ⅱ ハーソンの文学世界』(新曜社、二〇〇九年)など。〉

